

「法教育」

って何だろう？

巻頭インタビュー



高校教員として教壇に立つ江口先生。
札幌を拠点に活躍する弁護士、石塚さん。
先生と元生徒、ふたりの思いをつなぐもの、
それは、「法教育への思い」でした。

地域で、学校で、職場で、家族で。人と人が関わり合いながら暮らしていると、トラブルや問題はど
うしても起きてしまうもの。法律のありかたを学
ぶことは、そんなときに自分の頭で考え、判断し、
行動するための助けとなります。それが「法教育」
という取り組みの、いちばん根っこにあるものです。

「思い」が人を動かして



道内でも、法教育の取り組みは徐々に広がりを見せてい
ます。その先駆けといえるのが、江別市にある立命館慶祥
高校です。江口先生が公民の教員として赴任してきたの
は、今から14年ほど前のこと。「法教育に力を入れたい。ぜひ
その先頭に立つてほしい」という、当時の校長の願いを受けて
のことでした。しかし、法律に関しては素人も同然。手探り
での体制づくりが進む中で、札幌弁護士会の門を叩いたそ
うです。「何かつながりがあったわけでもなく、ほとんど飛び
込みです。私たちの取り組みへの理解と、協力を得られない
かと考えたんです」。この訪問をきっかけに、新たな動きが
始まりました。札幌弁護士会に所属する弁護士がボラン
ティアで学校へ出向き、講義を担当。道内高校生を対象と
したジュニア・ロー・スクールの開催など、私立校、公立校の枠
組みを越え、弁護士会と現場の教師たち、大学との連携に
よる取り組みが広がってきました。

法教育が、夢へ向かう心を後押し

札幌で弁護士として活躍する石塚さんは、立命館慶祥高
校の卒業生。弁護士という職業で人の役に立ちたいとい
う思いは、小学生の頃からのものでした。高校時代の江口先生
との縁は、意外にも「野球の全校応援」だったとか。「私は野
球部だったんですが、2年生のとき、試合の応援で応援団長
になったんです。そのとき生徒を取りまとめていたのが江
口先生で、大学まで野球をされていたということで、話が盛
り上がって」。授業などで直接の関わりはないものの、このと
きの会話がきっかけで、進路の相談に乗ってもらったり、本を
借りたりと、交流が始まります。「ほくも野球少年だった
し、思いが重なるころがあったのかな」と江口先生。やがて
3年生になった石塚さんは、ひとつのテーマについて論文を書
く「課題研究」という授業で、司法改革、とくに陪審制度を
テーマに選択。実際に弁護士から話を聞くなどしながら、司
法の世界についてこつこつ学び、江口先生のバックアップのも
と、1万5千字の論文を書き上げました。



石塚慶如 いしづか・やすゆき

札幌総合法律事務所弁護士。高校卒業後、立命館大学
法学部を経て同大学法科大学院修了、2008年司法試
験合格。環境問題と法教育の取り組みに意欲を燃や
している。札幌弁護士会の草野球チームでも活躍中。

つながる思い、広がる輪

「弁護士となった今も、なぜ?と疑問を持つことはとても
大切だと感じます。なぜ?と考えることで、相手方の主張の
矛盾に気づいたり、事件のイメージがつかみやすくなったり
する。そう気づかせてもらえたのは、高校時代に学んだ法教
育のおかげだと思っています」と石塚さん。法教育で身につ
けた「考える力」は、法律の世界を目指す学生だけでなく、
誰の生活でも必ず役立つということを伝えていきたいと語
ります。石塚さんは現在、札幌弁護士会でさまざまな教育
活動を行う、市民ネットワーク委員会に所属。ジュニア・ロー・
スクールの運営や母校での出前授業を通し、ときには先輩と
して高校生の相談に乗ったりアドバイスをすることもある
そうです。江口先生も、「年齢的に近いから、彼のアドバイ
スは高校生たちにとって、すごくいい影響があるようです。教
え子がこういう形で戻ってきてくれるというのは、ひとつの夢
でしたね」と語ります。石塚さんが背中を押した高校生たちが法
教育の現場で活躍する日も、そう遠くはなさそうです。



江口 準 えぐち・じゆん

立命館慶祥高等学校主幹教諭。担当は公民。法教育の
取り組みに力を注ぎながら、弁論研究部顧問として、全
国大会で14度の優勝へと導いた。幼少時～大学時代ま
で野球を続けてきた「根っからの野球少年」。